

IV-409

高齢者利用を考慮したアクセシブルな
河川に関する一考察

秋田大学 学生員 ○ 藤田 勝
秋田大学 正 員 清水 浩志郎
秋田大学 正 員 木村 一裕

1. はじめに

河川空間は、オープンスペース、水、緑など多くの要素からなり、都市域における余暇活動の場として魅力をもっている。そのため今後高齢社会においては河川敷を余暇活動の場として利用する高齢者の増加が見込まれ、高齢利用者を考慮した整備が必要であると思われる。とくに、高齢者は身体的機能の低下により、移動に対する負担が大きくなるため、高齢者の移動特性を考慮したアクセシブルな空間の整備が必要と考えられる。

そこで、本研究では河川空間に対する行きやすさとして、アクセス施設と情報収集について検討を行い、アクセシブルな河川空間のあり方について考察するものである。

2. 研究の概要

本研究のフローチャートを図-1に示す。

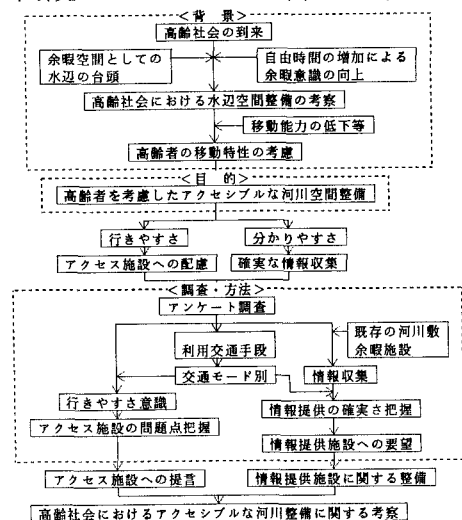


図-1 研究のフローチャート

本研究では初めに、河川敷利用時の交通手段別に、河川敷へのアクセス施設の問題点を明らかにする。また、情報収集については、既存の河川公園を取り上げ、それぞれの情報収集の現状を明確にし、河川空間における情報提供施設に対する意識を明らかにする。以上のような分析を行なうため、アンケート

調査を行った。調査は、秋田県内を流れる雄物川沿川の秋田市と雄和町に住む40歳以上の方を対象とし、調査票の配布を行った。有効回収数は310票である。回答者の年齢構成、年齢層別の河川利用状況については表-1に示す。ここで、年齢層区分にあたって、就労状況および移動能力への変化が生じる55～64歳の期間を、中年と高年の意識を明確にするためにあえて中間層とし年齢層の設定を行なった。

表-1 年齢構成および河川利用の有無

	票数	水辺利用者
中年層（40～54歳）	109人	64人（58.7%）
中間層（55～64歳）	69	46（66.7%）
高齢層（65歳以上）	132	94（71.2%）

3. 河川の行きやすさ

河川利用時の交通手段は、年齢の違いに関わらず徒歩、自転車、自動車の利用が多くみられる（図-2）。とくに、自動車利用者は年齢が下がるにつれ多くなっており、今後河川敷において高齢者の自動車利用増加が見込まれる。

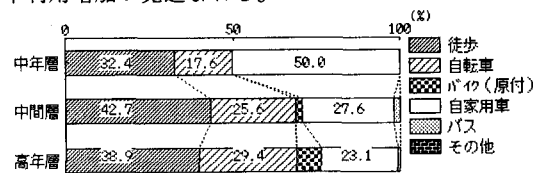


図-2 利用交通手段

次に、高齢者の河川への行きやすさに対する意識を利用交通手段別にみると、自転車については約70%が行きやすいと回答しているのに対し徒歩、自動車では行きにくいといった回答が約50%みられる（図-3）。

そこで、行きにくさに関わる要因を明確にするため、徒歩と自動車利用に関するアクセス施設（階段、

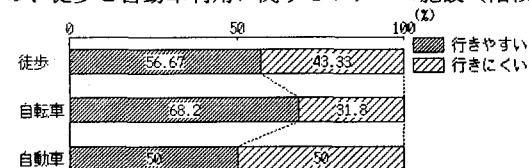


図-3 交通手段別の水辺の行きやすさ（高齢層）

表-2 高齢者のアクセス施設への不満（徒歩）

階 段		割合(%)	スロープ		割合(%)
階段がない		54.1	スロープがない		45.4
階段あり	手摺がない	32.4	スロープあり	手摺がない	30.0
	勾配がきつい	32.4		勾配がきつい	21.6
	破損している	29.7		路面が凸凹	18.2
	夜間暗くて危険	51.3		夜間暗くて危険	31.8

（そう思う+時々思う）

（複数回答）

スロープ、駐車場等）の不便さについて質問をおこなった。その結果、徒歩利用者では堤防の階段、スロープに対して、構造的な問題に比べ、絶対数の不足と夜間利用時の危険を挙げる回答が多くみられる。一方、自動車利用者では「駐車場がない」「駐車場がわかりにくい」への回答が多くみられるもの（図-4）、他の年齢層では「駐車場がない」といった回答が少なことから、絶対数が不足しているとは思われず、どこにあるかわからないといった分かりにくさの問題が関わっているものと考えられる。

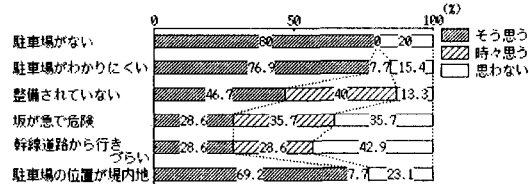


図-4 高齢者のアクセス施設への不満（自動車）

4. わかりやすさ

河川利用における情報収集の現状を明確にするため表-3に示す河川敷の余暇施設を取り上げ質問を行った。なお、図-5～6は、施設集計結果を合計したものである。

表-3 河川敷の余暇施設事例及び利用割合

施設名	位置	利用者割合(%)		
		中年	中間	高年
水辺の広場	雄物新橋付近	33.9	34.8	38.6
河川公園	秋田大橋付近	31.2	31.9	25.0
ゴルフ場・ランド	秋田市仁井田付近	60.6	49.2	49.2

年齢層別に河川余暇施設を知った情報源について集計した結果、中年層に比べ高年層で「市政だより・回覧」などの公的なメディアからといった確実な情報収集が行なわれている（図-5）。

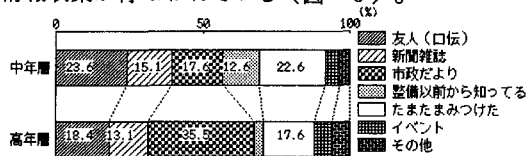


図-5 年齢層別の情報収集

つぎに、河川敷の余暇施設を初めて利用する場合に迷ったかどうかについて、年齢層ごとの利用交通手段別に集計をおこなった結果、ほとんど「知っていたので迷わない」と回答しているものの高年層の自動車利用者で「迷った」が約30%みられる。これは、高齢者の情報理解力の低下も考えられるが、現地付近での誘導が不十分であることを示唆しているものと思われる。とくに今後、高齢者の河川敷への自動車利用の増加が見込まれるなかで、自動車利用者に対する確実な情報の提供とくに現地付近での誘導が必要であると思われる。

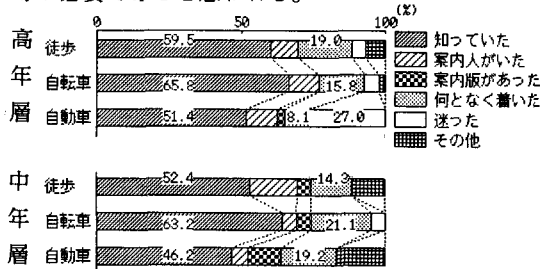


図-6 年齢層別の河川余暇施設までの道順に関する集計

そこで、現地での情報提供施設として、標識を取り上げその必要性および標識のあり方について質問を行った。その結果、進路を示した標識が必要であるといった回答は高年層で約80%と高く、要望の高さがうかがえる（図-7）。また、標識のあり方については、個々の河川の特徴を示した標識に比べ、どこの河川にいてもわかるような統一性を挙げる回答が多くみられる。

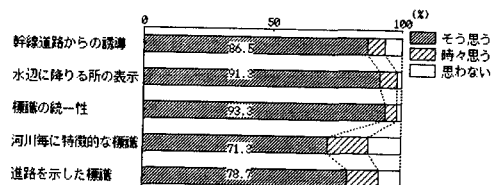


図-7 高齢者の標識に対する意識

5. まとめ

本研究では、アクセシブルな河川空間整備について、アクセス施設と情報収集の2つの方向から考察を行った。その結果、アクセス施設については徒歩利用者で、堤防における階段等の絶対数不足と照明施設の必要性が指摘された。とくに自動車利用者では、情報収集に関する集計からも見られるように、駐車場等のわかりにくさが指摘されたことから、河川敷への誘導施設として、確実に統一性を持つような情報提供施設の設置が必要であると思われる。